
「なぜここには冠詞が入らないのですか？」

—高校ドイツ語授業での冠詞の用法の教授法を巡る考察—

高瀬 誠

1. はじめに

いつもの様に授業終了を告げるチャイムが鳴った。

筆者：「… 分らない事があれば遠慮なく質問して下さい。それでは今日はここの
でに。Auf Wiedersehen!」

生徒達：「Auf Wiedersehen!」

と、いつもの様に挨拶を終えると、一人の生徒がやって来た。曰く「先生あの、
分らない事があるんですけど。」「何でしょう?」「いえ、今日の授業の事じゃなく
て、自分でやっている問題集についてなんです、あとでメールしてもいいでしょ
うか?」「もちろん構いませんよ。」

この様な会話を交わして帰宅した後、届いた mail に件の生徒のものがあつた：

> 高瀬先生

> こんにちは。

：

中略

：

> こんな事もわからないの…的な事かもしれないのですが、【冠詞】です。

>

> 問題によって【冠詞】が付いていたり、いなかったりで、きちんと理由は
あるとは思いますが、何で解答のようになるのかわかりません。

>

> 【1】

> 1a) Der Onkel wäscht Socken.

> 1b) Wo wäschst du die Socken?

>

> → なぜ 1a) には定冠詞が入らないのでしょうか？ 1b) 同様、1a) にも冠詞が入ると思ったのですが、解答には冠詞がない…

>

> 【2】

> 2a) Die Jungen und Mädchen schwimmen gegen den Strom.

>

> → 複数で冠詞が同じだから 1 つだけ？

> それとも別な理由あり？

>

> 2b) Ich nehme Bücher und Hefte aus dem Koffer.

>

> → なぜ 1 つも冠詞が付かないのでしょうか？ 2a) も 2b) もどちらも複数なのに…

∴

中略

∴

> よろしくお願ひ致します。

本稿は以上の事情から受け取った mail での質問と筆者からの回答、それを巡っての考察を報告としてまとめたものである。

2. 問題集の中での扱い

この生徒が利用している当該の問題集(森(2006))内でそれぞれの文がどのような形で出てきているのか、確認してみた。まず mail 内の【1】での文が出ている箇所(森(2006), S. 65)では以下の様になっている：

練習 4 例を参考に waschen を使って、次の日本語をドイツ語にしてみましょう。

例：私は下着(e.Wäsche)を洗濯します。→ Ich wasche Wäsche.

1. 君はそのシャツ(s.Hemd)を洗うのですか？
2. 叔母(e.Tante)は1枚のブラウス(e.Bluse)を洗っています。
3. 私達は下着(無冠詞で)を洗濯します。
4. 叔父(r.Onkel)は靴下(pl.Socken)を洗濯しています。
5. 彼らは1台の自動車を洗っています。
6. 君はそのジーンズ(pl.Jeans)を洗うのですか？
7. 叔母は下着を洗濯します。
8. どこで君はその靴下を洗うのですか？

質問の対象になったのは上記の 4. と 8. であるが、この練習問題では waschen をはじめとした fahren, schlafen 等の動詞の人称変化の学習が主な目的で、冠詞については比重が軽くなってしまうのはやむを得ない事であろう。しかしそれでも、「その」や「1枚の」などの語を用いて、冠詞が付くことを示唆したり、「下着(無冠詞で)」などの指示を出していたりして、冠詞についての混乱を極力避けようという著者の配慮は伺える。

次に mail の【2】の文がある箇所も引用してみる：

(森(2006), S. 90f.:)

練習 2b aus(~の中から)を使って、次の日本語をドイツ語に直してみましょう。

1. 彼の妻が家の中から出てきます。
2. 君は君の部屋の中から出てきます。
(中略)
8. 君はビールをいつも瓶から飲みます。
9. 私は本(pl.Bücher)とノート(pl.Hefte)をトランク(r.Koffer)の中から取り出
します(nehmen)。

(以下略)

(森(2006), S. 97.:)

練習 3d gegen(～に向かって、～に逆らって)を使って、次の日本語をドイツ語に直してみましょう。

1. その少年はそのボール(r.Ball)を石墻(e.Mauer)に向かって投げます(werfen)。
2. 彼らは風(r.Wind)に逆らって前進します(marschieren)。
3. その少年達と少女達は流れ(r.Strom)に逆らって泳ぎます。

(以下略)

質問の対象になったのは、練習 2b の 9. と、練習 3d の 3. である。これらも前置詞の使い方が主な学習目的で、冠詞の使い方については比重はやはり軽くなってしまう。とはいえここでも「その」様な語を使って冠詞についての示唆はある。

3. 視点の違い

一般に初級段階の授業で冠詞・名詞を扱う場合、格とそれに伴う変化形に重点を置く事となる。従って冠詞そのものの使い方については、ごく簡単に触れるか、練習問題で示唆する程度に留める結果になる。また当該の問題では、強変化動詞の人称変化や前置詞の使い方が主たる学習目的なので、冠詞については一層比重が軽くなってしまう。

前節で見た通り、出題されている森(2006)の中では、それなりに冠詞の使用についての示唆があり、それに沿っていけば(たとえ正解ではなくても)解答できるようになっている。

しかしこうした出題者の思惑に沿って学習者が学んでいくとは限らない。また、十分な配慮をして作成したつもりの課題でも、学習者の視点から見ると意外な所に落とし穴がある場合もある。改めて質問の mail にあるように文を並べてみると、たとえ問題文で示唆されていても、冠詞の有無について疑問が出てくるのも頷ける¹⁾：

1) 本稿ではこれ以降、各文にこの番号を用いていくことにする。

- 【1】 1a) Der Onkel wäscht Socken.
1b) Wo wäschst du die Socken?
- 【2】 2a) Die Jungen und Mädchen schwimmen gegen den Strom.
2b) Ich nehme Bücher und Hefte aus dem Koffer.

筆者自身も同様な課題を出すことがあるので、改めてこの学習者からの質問に眼を啓かされた思いがした。

4. 説明にあたって

次に、初学者 — 特に高校生 — に対して文法的な解説をする際に筆者が気をつけている点と、当該の質問に答える際に配慮していた点を挙げておく。

平易な言葉で説明する

文法の解説をするには文法用語の使用が避けられない。これを用いることでスムーズに説明を進めることもできるようにもなる。しかし高校生の初学者にとって難解な文法用語は理解の障壁となることもある。説明の際には学習進度に合わせて適切な表現を用いる必要がある。

簡潔、コンパクトにまとめた説明をする

ある文法事項を説明しようとする場合、詳細な説明になりすぎると全体像を掴み難くなることもある。特に初学者には簡潔・コンパクトな説明をすることでまずは大まかな全体像を掴んでもらい、学習が進むにつれて詳細な点に触れていくようにした方が効果的であろう。

論理的一貫性を保つ説明をする

仮にある文法事項の説明が、別の文法事項の説明と矛盾してしまったとしたら、それは最初の説明が間違っていると言わざるを得ない。当該項目だけでなく、別の項目にも生かせる一貫した説明をすることで、学習者の文法についての理解を深めることになる。

解答のヴァリエーションを見せながら説明する

当該の問題集でも冠詞の使い方について、簡単な説明がなされている(森(2006), S.49, S. 55f.)。筆者の経験でも高校の授業ではこれ以上の説明をする時間をとるのは極めて困難である。従って学習が進むにつれて新しい項目を学習するのに伴い、冠詞の使い方についての練習も暗示的にはあるが少しずつ取り込むようにしている。その場合、解答と解説の際には、別の可能性も挙げるなどしてそれぞれの違いも説明するようにしている。今回の質問の回答でも、いくつかのヴァリエーションを挙げて説明する必要があるだろう。

具体的なコンテキストを補って説明する

冠詞の使い方については、語法の心態詞などの場合と同様に、単独の文だけで理解するのは極めて難しく、その文が出現するコンテキストが伴って初めて容易に理解できるようになることが多い。従って説明をする際にはそれを補って理解を助けるようにする必要がある。

5. 質問への回答

前節で挙げた点に留意しつつ解説をすることにした。以下が筆者が出した回答の mail である。

こんにちは、高瀬です。Mail 拝読しました。

> 早速素朴な疑問が発生しました。

中略

> 【冠詞】です。

きましたか、冠詞が。(笑)

以下にある疑問点ですが、実は結構難しいところで、私の授業ではもちろん、一般に初級段階では触れないまま先に進むのが普通です。ですからお訊ねの様な疑問が出てきても当然だと思います。(^^)

> 問題によって【冠詞】が付いていたり、いなかったりで、きちんと理由はあるとは思いますが、何で解答の様になるのかわかりません。

冠詞について考える時には、単独の文だけではよく分からないことが多く、その文が使われているコンテキストも想像してみる必要があります。とにかかく見てみましょう。

> 【1】

> 1a) Der Onkel wäscht Socken.

> 1b) Wo wäschst du die Socken?

>

> → なぜ 1a) には定冠詞が入らないのでしょうか？ 1b) 同様、1a) にも冠詞が入ると思ったのですが、解答には冠詞がない…

1a) での **Socken** に冠詞が付いていないという事は、この文では靴下は特定していない、あるいはわざわざ特定する必要はないものだという事です。例えば

Der Onkel wäscht Socken, während die Tante in der Küche Kaffee kocht.

の様な状況を考えてもいいかも知れません。これだと「おじさんは靴下を洗って」いて、「おばさんはキッチンでコーヒーを沸かして」いる、という様にそれぞれの人の行為(**Socken waschen** と **Kaffee kochen**) に焦点が当たっていて、目的語の名詞に焦点が当たっている訳ではないのがお分かりになると思います。

それに対して 1b) の文で **die Socken** となっているのは、この靴下に話し手が焦点を当てて特定しているということです²⁾。例えば聞き手(文中で **du** で呼ばれている人)が汚れた靴下を手に見ているのを見て、「どこでその靴下を洗うんだい？」と訊いている様な状況を考えてもいいでしょう。

【2】の方は 2b) から考えたほうがいいかも知れません。

2) DUDEN Bd. 4 (2009), 386f., Helbig/Buscha (2001), S. 333f. を参照。

> 2b) Ich nehme Bücher und Hefte aus dem Koffer.

これも【1】の1a)と同様に Bücher も Hefte も特定していない、あるいはわざわざ特定する必要はない、と考えるといいかも知れません。つまりここに焦点が当たっているのは「本やらノートやらをトランクから出す」という行為であって、「本」や「ノート」に焦点が当たっている訳ではありません³⁾。

例えばこの人は、取材旅行中に急に調べ物をしなければならなくなって、『私は本やらノートやらをトランクから出す』ことになる、という状況を考えてみてもいいでしょう。

ここで

2b') Ich nehme die Bücher und die Hefte aus dem Koffer.

と定冠詞を付けると、

(調べ物をする時に)

『私は「この本」と「このノート」を(それぞれ)トランクから出すのさ』
という風に、複数ある特定の「本」と「ノート」を指していることになります。

【1】や【2】の2b)に比べて

> 【2】

> 2a) Die Jungen und Mädchen schwimmen gegen den Strom.

こっちはちょっと厄介です。実は上の2a)以外にも

2a') Die Jungen und die Mädchen schwimmen gegen den Strom.

3) DUDEN Bd. 4 (2009), 444, Helbig/Buscha (2001), S.338 5.4.3.1-1 を参照。

2a'') Jungen und Mädchen schwimmen gegen den Strom.

の2つも文法的に成立し得るからです。(^_^;;)

まず 2a'') を片付けてしまいましょう。これはもうお分かりかと思います。Jungen も Mädchen も定冠詞が付いていないという事は、特定していない、あるいはわざわざ特定する必要はない「男の子達」と「女の子達」を意味しています。ですから『(年頃の)男の子や女の子っていうのは、流れに逆らって泳ぐものさ』という様な一般的な意味を持つ表現になります。

さて 2a) ですが、図解すると

Die	Jungen	schwimmen gegen den Strom.
	und	
	Mädchen	

という様になり、この場合話し手は Jungen と Mädchen を一纏まりと考えているようです。つまり『男の子達も女の子達も流れに逆らって泳いでいる。』という意味になります。この場合男女混合で泳いでいることになります。それに対して 2a') は

die	Jungen	schwimmen gegen den Strom.
	und	
	Mädchen	

となりますが、この場合話し手は die Jungen と die Mädchen をそれぞれ分けて捉えているようです。つまり『男の子達と女の子達は(それぞれ別々に)流れに逆らって泳いでいる。』という意味になります⁴⁾。

この事は先に説明した【2】の 2b') でも同様です。

⋮

(中略)

⋮

また、繰り返しになりますが、冠詞について考える時には、当該の文につい

4) DUDEN Bd. 4 (2009), 1418 を参照。

ただけではなく、その文の出てくる状況などについても考える必要があります。なかなかうまくいかない時もあるかもしれませんが、ゆっくりとやってみるのもいいかと思います。(^_^)

(以下略)

6. 最後に

今回取り扱ったある生徒からの質問で、教授者側の思惑に学習者が沿うとは限らない事、効果的な学習を促すには学習者側の視点を持つのが大切だという事を、改めて認識させられた。

とりわけ冠詞は前述の通り、単独の文だけで理解するのは難しい学習項目である。従って複数の文を組み合わせたり、言語外の状況を設定したりして、一定のコンテキストの中で理解を促すようにする必要がある。しかし、高等学校の初級段階の授業でそうした機会を設けるのも、時間的に難しいところがある。そうすると他の項目を学習する際に、このテーマも副次的に(できれば反復して)取り扱う事で補っていくしかない。また、練習問題などでも必要に応じてヴァリエーションを示しながら表現の可能性を提示するのもいい方法であろう。

今回必要が生じてこの様な報告をする事となったが、当該項目に関しての筆者の理解や説明もまだ十分なものとは言えない点もあろう。お気づきの点などあれば筆者にもご教示頂ければ大変幸いである。

参考文献

森泉：『しっかり身につくドイツ語トレーニングブック』ベレ出版、2006年。

DUDEN Band 4: *Die Grammatik*, 8., überarbeitete Auflage, Herausgegeben von der Dudenredaktion, Mannheim, Zürich: Dudenverlag, 2009.

Helbig, Gerhard/Buscha, Joachim: *Deutsche Grammatik, ein Handbuch für den Ausländerunterricht*, Berlin, München: Langenscheidt KG, 2001.

(たかせ・まこと 学習院大学外国語教育センター非常勤講師)